

# 性の存在論と再構築

—— 批判的実在論の立場から ——

Carrie Hull,  
*The Ontology of Sex: A Critical Inquiry into the  
Deconstruction of Categories*  
(Routledge, 2006)

山 本 耕 平

## 0. はじめに

世界を分節化するカテゴリーの実在性や普遍性への問いは、現代思想における一つの大きな問題である。それは人種、精神障害、セクシュアリティなどをめぐって、それまで人々の間で、そして科学の諸分野においても本質的と捉えられてきた概念、さらにはわれわれの知識の確実性にさえも、揺さぶりをかけることとなった。しかし一方で、その徹底した懐疑論および相対主義によっていくつもの困難をもたらすことにもなった。本書は、主に生物学的性およびセクシュアリティにおけるポスト構造主義／社会構築主義的理論に対する実在論的批判の書である。

著者はトロント大学とウィルフレッド・ローリエ大学の助教授で、専攻は政治学である。本書の序文は、1990年代初頭に著者が参加したワークショップについての個人的なエピソードから始まる。「カテゴリーの脱構築」と「カテゴリーの再構築」という2つのプログラムによって構成されていたそのワークショップにおいて、前者に関しては数多くのめざましい研究があったにもかかわらず、後者に関しては全く有効な研究が生み出されていなかったのである。本書で著者は、批判的実在論の立場から、生物学、人類学、哲学などの広範な分野から理論や事例を援用し、性に関わるカテゴリーの再構築を目指している。

## 1. 批判的实在論の動向

本文を検討する前に、本書の理論的背景の批判的实在論について解説を加えておく。社会学の領域ではマーガレット・S・アーチャーに代表される批判的实在論は、イギリスの哲学者ロイ・バスカーの提唱した理論から出発し、諸分野にわたって1つの潮流をなしている。バスカーは1970年代から、実証主義と解釈学を乗り越えるために批判的实在論を提唱してきた。実証主義は、因果的法則を経験的な規則性に還元することでヒュームの懐疑論を乗り越えられなかったし、解釈学は行為者の相互行為に全てを還元してしまったことで、相対主義から逃れることができなかったと批判し、バスカーは、これらの挫折の要因を、対象の分析において観察可能なもののみに依拠する経験主義的傾向に見出す。そしてこれらを克服するために、現象を生起させるメカニズムの自律性、先行实在性を認め、潜在的な構造から現実の出来事への因果的な影響を説明する必要があると主張する。

著者は、批判的实在論はわれわれの経験の重要な特徴の可能性の条件を、すなわち、われわれが特定の種類の経験を規則的にしているならば世界はどのようなものでなければならぬかを、アポステリオリに説明しようとするものであると説明する。因果的構造に言及する以上、批判的实在論は超越論的であることは免れ得ない。しかし、現実の出来事を離れて作用するものへの言及は、それを現実の世界から離れたところに措定するということではない。生物学的な規則は物理的な实在性を、社会的な規則は物質的な諸個人を必要とし、これらの関係において作用するメカニズムは、あくまで实在するのである。生じ得ることの全てが実際に生じるわけではないが、一方で、実際に生じていることの全ては、ある理由や要因のために生じている。可能性はしばしば実現されないというこの考えから、批判的实在論は生成する可能性のあるものと現実に生成しているものの明確な区分を前提していると言える。

## 2. 唯名論および行動主義とフェミニズム

ここから、構成に従って本書の論旨を整理していく。まず著者は、古代から近代の実証主義に至る西洋哲学の系譜を整理し、その試みのほとんどが確実性の探求であったことを指摘する。20世紀の哲学は、このような西洋哲学の伝統に対する抜本的な批判であり、その代表的な提唱者として、著者はネルソン・グッドマン、ウィラード・V・O・クワイン、ミシェル・フーコーを取り上げ、彼らによって展開された唯名論、言語哲学における行動主義behaviorismといったパースペクティヴのフェミニズムへの影響に言及する。フェミ

ニズムの共通分母は哲学的基礎付け主義への挑戦であり、その発展の上で、ジェンダー／セックスの区別さえも疑問に付す潮流が生まれた。この流れの中で最も著名なのはジュディ・バトラーであろう。バトラーにとって、言語がまさにわれわれの思考プロセスを形成するのだから、意味が付与されない客観的な「物質」を社会的世界へ持ち込むような概念は、既に意味で満たされている。ゆえにバトラーは、セックス（自然的とされてきたもの）とジェンダー（社会的とされてきたもの）を区別することを否定し、セックスの連続性を主張する。これが先に言及した哲学者たちの延長線上にあることは明らかである。

また著者によれば、バトラーやフーコーが性的カテゴリーの恣意性の論拠とするのはそのカテゴリーに収まらない例外的なものの存在である。自然科学者が生物学的なセックスの二項対立を絶対的な確実性として示せないことが分かると、フェミニストはそれを構築物であるとする。彼らにとって、類似性というものがあるならば、それは論理的な明晰性をもって作用していなければならず、いかなる多様性も、カテゴリーや種が機能しないことの証明となるのであると著者はまとめている。

### 3. 唯名論の不十分さ

著者は、一部ではバトラーの理論に正当性を認めるが、説明としての不十分さも指摘している。諸個人が思考や発話において純粋に自己構成的であるなどとはもはや認められないことは、もちろん著者も認めている。しかし、複数の人がある刺激に対して異なる反応を示す場合、そこには何らかの力があるはずであるのに、いかにしてその差異が生じたのかを説明出来ないことは、大きな困難であると、著者は指摘する。バトラーは、人種分離法が施行されていた1955年に白人に席を譲ることを拒んだローザ・パークスの事例を使うが、なぜ彼女は1950年には同じことをしなかったのか。バトラーに言えるのは、彼女は何らかの理由によって、人種差別的な言説とそれとは別の言説のネットワークとの間の関係に接触できるようになったということだけであろうと、著者は批判する。

实在論者は、自然界の研究に論理法則を手放しで導入することに疑問を投げかけ、カテゴリーに対する例外の存在が、諸個人に適合する一般的説明があり得ないことを示すわけではないと考える。事物をグループ化する方法の全てが等しく相対的なのであれば、相関関係や因果関係は均等化されてしまい、可能性があるが実践されていないものと、可能性がないものとの違いも隠匿される。实在論者はあくまで、カテゴリーは類似した因果的構造を持つということにおいて結合された存在物によるものであり、その因果的構造はそれらの存在物の特性を「説明する」ものであれば十分であると主張する。

もっとも著者は、これが複雑な問題を抱えるという事実を自覚している。ほとんどのシステムは環境に対して開かれており、物理的なそれとは違うからである。エルンスト・マイアによれば、多様性は、進化がそれに依存するゆえに生物学における法則である。また彼によれば、同定される種は世界の複雑な因果的構造に適合していることを認める必要がある。そして、その因果的構造を完全に理解するためには、ある生物学的特性にとっての目的ないし機能が発見されなければならない。これに対してフェミニズムは、人間には環境を変える力があることを強調し、進化論的理解を人間の行為へそのまま適用することに注意を払う。確かにマイアの理論では、「適合性」という概念があまりに性急に全ての性質の説明に使われてしまうことがあるため、このように留保をつけることは重要である。しかし、顕著な表現型の特性は、その進化的生存への貢献によって説明される、という一般的合意もあるのではないか。著者はこのように主張し、性的な表現型はまさにこの例の1つであると考え。生殖器そのものは種によって大きく異なるが、一方でエストロゲンとその受容器は、進化の時間の中で驚くほど安定している。ここで著者は、ルース・G・ミリカンの「固有機能」という概念を援用し、議論を整理する。ある物の固有機能とは、それが通常行っていることであり、通常行っていることとは、何らかの進化的「目的」をもたらしてきた何ものである。

従事する仕事による性の区別と生物学に従うそれを均等化する諸理論に対して、実在論者は、確固たる線を引けずとも、生物学的多様性と文化的多様性を区別する重要性を主張する。女性が社会的人間として構築されるレベルは、人間の間に性差があるレベルから創発する、というキャロライン・ニューの実在論的見解を引用し、著者は、性差は実在的なものであり文化横断的に適用され、だからわれわれは、女性性の意味が文化的に多様であろうとも、女性を同定することが可能だと主張する。ただし、性的差異があるレベルは低位のメカニズムなので、その作用は、生殖やセクシュアリティを統制する他の方法と両立し得ると注意を促してもいる。

さらに著者は、カテゴリーについての相対主義的な観点は、例外の観察にも困難をもたらすことを指摘する。すなわち、もし実在的な自然的種がなく、またわれわれの構築作用に自然化された種を作るに十分な力があるのであれば、なぜ例外が生じるのか。そして、逸脱的なものは身体のカテゴリ不可能な性質の証として取り上げられ、既存のカテゴリに押し込まれていたと説明されてきたが、誰かがその例外に気付いたのであれば、この稀な不同意が説明されるべきではないか、ということである。物理的・自然的世界の権利を否定しない穏健な立場をとったとしても、とにかくあるものを区別する際には類似性と差異の経験的把握が求められ、最小限の経験的把握がなければ、なぜ多様性のうちの1つが他よ

り注意を引くのかさえ説明されないと著者は批判する。

ポスト構造主義は、生物学還元主義の危険性を指摘したのみならず、自然的なものを論理的必然性に還元してしまったと、バスターは指摘する。中性は生物学的多様性を示すだけで、オス／メスを作り出す傾向にある構造が無いことを示すものではない。

#### 4. 形式や意味の構造と発展

言語によって人類は感覚データから引き離され、世界に整合的なパースペクティブを確立してきた。そしてそのパースペクティブにおける事実は、それを包含する理論に対して相対化される。著者によれば、バトラーはこのような見解に基づいて、生物学的性の観察が常に特定のジェンダー理解から生じると主張する。これと行動主義が合流し（著者は、バトラー自身の思惑とは逆に、彼女の人間理解および政治戦略は行動主義的なものに終始していると指摘している）、結果として、彼女の性的行為の分析は、特定の社会が条件づけを通じて奨励したり禁止したりしているものに限定的になると、著者は考えている。

ここで自然的種や構造について、著者はミリカンの事物substanceと属性propertiesについての見解を引用して整理している。事物とは、われわれがそれについて「比較的安定した」情報を集められる存在物のことである。事物は、その範囲において他のものを排除するような範囲で、属性を有している。この属性の概念によって、現実の構造化された関係の性質が明らかになる。属性がいかに測られるかに関わらず事物は概ね通時的に同じ属性を持ち、この確実性はまさに自然的構造から生じる。

先の定義に従えば、属性はその最も深い部分の性質において関係しているのであって、その関係性が存在論的地位を縮減しはしない。アードルフ・ポルトマンは、この関係性をわれわれの存在に構造化されたものであるとし、進化における形態の根本的な役割を主張した。彼は自身の研究におけるいくつかの発見を受けて、多くの生物の知覚可能な形態は、それを見る能力のある生物の存在を含意しているという仮説を提示し、「機能的結合」と呼んだ。

人間の行為は空気に対する肺の反応ほど予測可能な機能的結合ではないが、著者によれば、實在論者は気分や内章などを、実在的な属性として、多様な人間の行為の説明に適用する。気分は、行為を説明する1つの力もしくは構造であり、われわれの周囲の何かに対する真正の反応として「現れる」可能性を持っている、と著者は主張する。さらに近年の神経生理学的研究では、そのような「現れる」気分とそうでないものの差異も指摘されており、これらの事実はまさに行動主義の限界を提示する。人間の気分は機能的結合によっ

て構造化されていると同時に多様になり得るが、それも、生物学的には、人間の気分がより古く本能的な視床下部とより新しい大脳の両方による産物だということであり、気分の存在を否定はしない、と著者はまとめる。

この理論は性的形式にも関連すると、著者は続ける。人間の性差の高度な視覚性、装飾的な性的形態は、その世界の経験における視覚的役割の高度さと相関的で、われわれのより複雑な世界との関わりとともに進化してきた。われわれの劇的な感情性とそれへの意識が性的な行為の多様性をもたらしたことは、人間がより多様なし方で世界と相互作用していることの証拠だと著者は主張する。他の社会生活と同様、セクシュアリティも生物学的な力を前提する一方で、文化的に特定の慣習や規範、同一性を含むのである。

著者はニューを引用し、次のように結論する。「性差は、全ての想像し得る社会において実在的で顕著なものである」。さらに、「二型性の構造化は力強く、因果的に強力で、異なる生殖的役割と特定の性的な可能性と快楽を可能にし、他を排除する」。人間は入り組んだ構造化された性的形式を持っており、その形式は長い時間と幅広い動物の種を通じてできたものであるということと、人間は多様な、しかし完全にランダムではない性的行為に従事するということが、ともに理解されなければならないのである。

また著者は、形式を認識しそれに反応するわれわれの能力を、言語の問題にも繋げる。実在論者は、言葉の辞書的定義は他の言葉との関係に依存してあるが、一方で対象の感覚はその辞書的定義に依存せずにあると考え、何かを感じる、もしくは同定する能力を、言語を用いてそれを定義する能力と区別する。著者は、われわれは自分の姉について論理的ではないにせよ確実な感覚を持つというミリカンの指摘を援用し、辞書的定義は感覚に基づいていると主張する。さらに著者はマキシム・S・ジョンストンを引用し、子どもは「多くの基本的な触覚—運動感覚的な経験を有しており」、その経験が言語的な概念の構成要素を形成すること、そして、このような経験や情報の小片を繋げる能力が辞書的定義の基盤となると説明する。

ある個人が権威的で条件付けされた規範から離れて異なるフレーズを発話するという変化と、他のメンバーに対する理解可能性の背後にある原理とは何かが説明されなければならないと著者は考え、言語は常に「物事をなす」ために使われ、日常生活において経験的にテストされるという実在論的見解を提示する。この性質は、形態の論理と同様、話す機能と聞く機能がともに進化することを示す。全てのメンバーが感覚を持っている対象物や意味について、異なるフレーズがしばしばそれについての新しい情報をもたらすがゆえに、言語は繁殖する。これは単に多様な信念の地位に関わる問題ではなく、むしろ、われわれがそれを世界に対して何らかのやり方で関係させなければ、思考の進化は理解できないと、

著者は考える。

## 5. 多層的構造と進化論的説明について

以上が本文の論旨である。それでは、ジェンダーは比較的安定的なセックスに縛られざるを得ないのか、という疑問が生じるかもしれない。しかし複数のレベルが因果的に影響しているということは、より深いレベルにおける関係が他のレベルにおける関係に直接的に影響することを意味しない。本書の末尾で著者は、比較的安定した生物学的性と多様に変化してきたジェンダーの関係について、その比較的安定した構造をジェンダーの唯一の要因としてしまうと、ジェンダーの多様性を説明できないと注意を促している。これは批判的実在論がただの決定論ではないことの証である。階層間の関係は1対1対応ではなく、あるレベルでの類似性が他のレベルでのそれを保証するわけでもない。

また、著者が進化生物学を用いるのは、受容されている全ての性差を本質的なものと決めつけるためでないことは明らかである。進化論的説明は、ときに目的論的であるとして棄却されることがあるが、実際は過去すなわちわれわれ個人々に持ち込まれた自然史への適合を表現しているのであり、それがあたかもある目的へ向かっているように見えるに過ぎないと著者も述べている。実在論者が繰り返し述べるように、ほとんどのシステムは開放しており、常に偶然性が介入する余地がある。よって、本書で展開される存在論は、生物学的世界にも——構図としては社会システムと似て——歴史があり、われわれはその結果の上に、部分的にはそれに因果的に拘束されて生活しているということ、そして他の社会生活と同様、性にも存在論的に複数の階層が存在することを示すのみである。

## 6. おわりに

性の問題においても、複数の階層を分析することが必要である。本書における主張は、強引に要約すればこれだけのことかもしれない。しかしそれは、これまで性をめぐる人文科学的研究でほとんど無視されてきた事実であり、一方では性の理解において必要不可欠なものではないだろうか。そもそも、何かを語るときにある1つのパースペクティブに全てを還元してしまうことは、20世紀の社会科学がまさに避けんとしたことではなかったか。それならば、性に関わる全てを文化や言説に還元するのは、生物学に還元するのと同等に間違っているのではないか。

性の存在論というタイトルを冠しつつも、本書はカテゴリーや言語といったテーマまで

広く議論を展開しているため、現代における新しい実在論のアウトラインを探る上でも有効なものだと思われる。ただし、本書で展開されたのは、主にその最下層、もしくは最下層に限りなく近い層の分析のみである。性の文化的・社会的・言説的な側面に関してはこれまで数多の研究が残されているが、それらもこの存在論的分析を受けて再考されなければならないかもしれないし、それらを複合的に見ることで、より対象への理解が深まるだろう。本書の中で繰り返し述べられている通り、懐疑論は出発点でしかなく、その論理的帰結としての相対主義はその地点に留まっているに過ぎない。本書はそこから1歩を踏み出した。

### [文献]

- Archer, Margaret S., *Realist Social Theory : The Morphogenetic Approach*, Cambridge University Press 1995 (=2007, 佐藤春吉訳『実在論的社会理論——形態生成論アプローチ』青木書店)
- Bhasker, Roy, *The Possibilities of Naturalism, 3rd edition*, Routledge, 1998 (=2006, 式部信訳『自然主義の可能性——現代社会科学批判——』見洋書房)
- Millikan, Ruth G., *Varieties of Meaning : The 2002 Jean Nicod Lectures*, Cambridge : MIT Press, 2004 (=2007, 信原幸弘訳『意味と目的論の世界 生物学の哲学から』勁草書房)

(やまもと こうへい 修士課程)